座談会

ロスジェネ世代は何を経験してきたか？

―一九七一～八一年生まれからのメッセージ―

ロストジェネレーションと呼ばれる一九七一～八一年生まれの年齢層は、就職氷河期に直面し、フリーター、ニートという新たな言葉が定着した世代でもある。この世代は、「生きにくさ」といったキーワードでくくられがちだが、その当事者は、これまでの経験をどうとらえているのか。「フツーのロスジェネ」が、自分の人生を振り返り、静かに語りあった。そして、不況が深刻化するなか、これから社会にでる若者にメッセージを送る。

堀　この座談会は、ロストジェネレーションと呼ばれる世代の方たちに当事者として語って頂き、その声を誌面でお届けできればと考えるものです。お三方とも労働界に関係する組織に所属しておられますが、できれば本日はそれを少し離れてのお考えを率直にお伺いできればと思っています。

また、ご発言の背景には、これまで経験されてきたことが少なからず関係していると思います。そこでまず、自己紹介を兼ねて、差し支えない範囲でこれまでご自身がこんな風に生きてこられたといったお話をしていただくことから始めたいと思います。

ちなみに、私は一九七二年生まれで、ロスジェネの最年長世代に当たります。大卒時には、いわゆる就職氷河期というものに直面した世代です。私自身は大学院に進学したわけですが、移行期に同世代が就職氷河期に直面したことが私の研究分野の選択に強く影響を与えたとも思っています。それでは、安田さんからご経歴をお話いただけますか。

周りを意識せず、好きなことを仕事に

安田　私は一九七九年生まれで、東京で育ちました。高校は進学校に入ったのですが、中退して別の都立の定時制高校に入り直したので、高校を卒業するのに四年かかりました。私の入った定時制高校は良くも悪くも自由で、進路についても高校を卒業する間近になって自分で決めるように言われたぐらいです。

最近、派遣切りに遭った人が農業に行くという話がありますが、どうも景気が悪くなると農業に向かう人が増えるようです。私の卒業時もやはり就職しにくい時代で、私は高校を卒業して、長野のレタス農家で半年間アルバイトをしました。その後も三年ぐらい農業に関わり、その後は五年ぐらいフリーターをやりました。それから今の職場である「育て上げ」ネットに縁があって二年半ぐらい勤めて辞めて、また農業をめざしたり、サラリーマンを一年近くやったりして、昨年の秋に今の職場に戻ってきました。

要するに、私は好きなこと、自分がその時にいいと思ったことをやってきただけなので、後悔は全くないですし、周りの状況も全然意識せずに、自分の意思で今まで歩んできました。

堀　農業をされたり、サラリーマンになられてまた前の職場に戻ったりされたということですが、それぞれのきっかけのようなものはどういったことだったのでしょうか。

安田　第一に好奇心が旺盛だったこと。

出席者

安田　英文さん　NPO法人「育て上げ」ネット 企画営業部

伊澤　信昭さん　派遣ユニオン執行委員

渡辺　滉子さん　労働専門誌記者

〈コーディネーター〉堀　有喜衣　JILPT副主任研究員

いろんなことをしてみたい、いろんな世界を覗いてみたい、いろんな人に出会いたいということです。その結果、NPOで働きたいと思ったらNPOで働いて、農業をめざしたいと思えば農業をめざし、サラリーマンをやろうと思ったらやってと、その都度自分で考えて選択してきました。

人との出会いが転機のきっかけに

堀　農業をやめてフリーターになろうとか、あるいはNPOに行こうとか、サラリーマンを辞めてまたNPOに戻るとか、そういった転機の時のきっかけになるものは何かありましたか。

安田　やはり人との出会いが大きかった気がします。NPOで働くことや、また戻ることになったのは上司と会ったことがきっかけですし、いろいろな人に出会うなかで自然に転機が訪れた感じですね。

堀　では、「この仕事は嫌だから見切りをつけて違う仕事に」というのではなく、誰かとの出会いがあって、「あっ、こっちの世界にちょっと行ってみようかな」という感じですか。

安田　そうです。なので今後、もっと農業を本格的にやりたいと思う日が来るかも知れません。ただ、今はNPOで働きながら、今後の自分の仕事人生について、少し時間を置いて決めていきたいと思っています。

安田氏

堀　とても前向きな形で進んでこられたわけですが、途中で挫折しそうになったりしたことはなかったのでしょうか。

安田　いわゆるニートと呼ばれている状態の時に少しありました。そんなときは、やっぱり落ち込んでいましたが、それでも何かやっていればどうにかなるだろう、というような楽天的な考えでいましたね。

不当な天引きを取り返すために労組に加入

堀　伊澤さんはいかがですか。

伊澤　私は一九七二年生まれです。高校を卒業後、一年浪人して大学に行きました。四年で卒業しましたが、あまり考えずに法学部に行ったので途中で面白くなくなってしまい、もう一度、文学部に行こうと思って編入試験を受けて別の大学の三年に編入しました。とはいえ、延々と学生をやっていたらお金が尽きてしまうので、昼間は警備員のアルバイトをして学費を稼ぎ、夜間に学校に行っていました。

その後、大学院を受験したのですが滑ってしまい、警備員を続けながら翌年に入りました。でも、大学院の修士課程に四年行き、論文が通らず中退することになりました。それから仕事を探すことにして、たくさん応募したのですが全然だめで、そのうちに不眠症のような症状になってしまい、しばらくは静養していました。三年ほど前からは、全然仕事がないので日雇い派遣をしています。前の日に携帯電話で予約を入れて、当日、倉庫とかで作業するといったことをしばらくやっていました。

日雇い派遣では、安全協力費とかの名目で不当な天引きをされていました。そこで、それを取り返すために労働組合に入って交渉したりしているうちに景気が悪くなってしまい、日雇いの仕事自体が全然なくなってしまいました。今は予約をしても仕事がなくて失業状態なので、派遣ユニオンで電話番をしています。

堀　日雇い派遣の方のデータ装備費などの天引きについては、伊澤さんがそこで行動を起こそうとしたきっかけは何だったのですか。話を伺って凄く行動力があると思ったのですが。

声を上げないと話は始まらない

伊澤　きっかけは、特にはないですね。日雇い派遣を三年ぐらいやりましたので、しばらくは取られ続けていたわけです。でも、「自分が働いたお金を何で取られるんだ？」と考え、取り返そうと思ってネットで検索していたら、組合がこうした費用の返還請求していることを知り、行ってみようと思い立ったのです。

堀　伊澤さんは、「何かおかしい」と問題意識を持って労働組合へ行かれたわけですが、一般的には疑問を持っても、「まあ、しようがないか」と感じる人がほとんどではないでしょうか。

伊澤　ええ。そういうものだと思って諦めてしまう人は多いですね。

堀　端からは、そこで行動を起こすのと起こさないとの間に大きな差があるように見えます。だから、その時期の伊澤さん自身に何か大きな転機があったのではないか、と推察するのですが。

伊澤　転機らしい転機はなくて、何で行動を起こしたのかは自分にもわかりません。ちょっと前までは、日雇い派遣の不当天引きはどこでもやっていたし、会社があまりに大々的に天引きしているので、そういうものだと思っちゃう人はたくさんいましたよね。仮におかしいと思っても、請求したり声を上げることは面倒くさいので、そこで諦めてしまうという人もいるわけです。声を上げる人と上げない人がどう違うのか、そこはよくわからない。私は、何か言わないと話は始まらないので声を上げた方がいいと思っただけです。

長く働く場を見つけるのが課題

堀　では、その辺の話はまた後でお伺いさせてください。渡辺さんはいかがですか。

渡辺　お二人と共通する部分もあるなと思って聞いていました。私は一九七三年生まれですが、私も大学に入った後、学部にちょっと違和感があって入り直しています。卒業後、縁があって今、働いている労働専門誌を発行している会社に記者として入社できましたが、体を壊して一度辞めています。

その後は、アルバイトや契約社員などの働き方を経験した後、やはり縁があって今の会社に戻ることになりました。自分の中でやりたいことは一貫しているので、周辺の業種でずっと来て

います。とはいっても、簡単に次の会社が見つかったわけでもないし、規模の小さな会社ばかりで、働く環境の過酷なところが多かったです。会社自体が縮小したことも経験しましたし、正規なり契約社員という立場で入った職場では、ある程度、重い責任を課され、労働時間も長くなりました。そうすると、一回体を壊しているので、ついていけなくなって、あまり続かなかった職場もありました。

キャリアとしては、もう年齢も三〇代半ばになり、この先、そう簡単に職を転々とはできないという意識はあるので、いかに長く働く場を見つけるかというのが今の課題だと思っています。

難しかった好きな仕事と生活のバランス

堀　過酷な働き方というのは、例えば、一日のスケジュールってどういった感じだったのですか。

渡辺　記者という、わりと特殊な職種なので日によってまちまちですが、基本的にはやはり、仕事の量が多くて、それが故に働く時間も長くなってしまったのだと思います。

堀　体を壊されているぐらいだから、相当きつかったのですね。

渡辺　体を壊したのは、自身の体力面の問題もあったと思うので判断が難しいですが、バランスがうまくとれなかったことが大きな問題だったと思っています。好きな仕事に就けたことで四六時中仕事のことを考える生活になってしまい、知らず知らずのうちに仕事と私生活のバランスがうまくとれなくなってしまっていました。どちらかというと、量的よりも質的な問題かも知れませんが、心理的に仕事のプレッシャーを抱え過ぎてしまい、徐々にバランスを崩してしまったという実感があります。

堀　体を壊される前に、例えば、「ちょっと今きついので、仕事を少し減らしてもらえませんか？」などと相談するようなことはできない雰囲気だったのでしょうか。

渡辺　いま思えば、その頃はとにかく夢中で働いていたので、バランスを崩しているといった自覚が全くなかった気がします。自覚があれば、とりあえず休んだりしたと思いますが、自分の中でそういった感覚がないから、ひたすら「働かなきゃ」とか「行かなくちゃ」と思うばかりで、付いていけないのは自分が悪いと考えていたのではないでしょうか。当時、自分の働かされ方に問題があるという発想は、恐らくなかった。無意識のうちに、「そこにある仕事は当たり前で、それをこなすのも当然」という生活を続けていたのだと思います。

堀　やりたいことに熱中して結果的にバランスが崩れてしまうというのは、凄くわかる感じがします。

では、これからは私の方でテーマをお示しして、話の中で広げていければと思います。まず、我々の世代は突然のように「ロスジェネ」と呼ばれるようになったわけですが、このことについてどう考えているのか。ずっと「就職氷河期世代」と言われてきましたが、私自身は「ロスジェネ」という呼ばれ方にもやや違和感があります。移行期に就職困難期に当たった人たちを世代として一括りにされているわけですが、世代の一体感のようなものをお感じになっているかどうかも含めてお伺いしたいのです。今度は渡辺さんからお願いします。

希薄だったロスジェネ世代としての意識

渡辺　率直に言うと「ロスジェネ」と呼ばれることについての意識は、どちらかといえばなかった方なので、その言葉を知った時は「いつの間にそう呼ばれていたんだろう？」といった感覚が凄くありました。ですから、世代の一体感と言われても、あまりないのが正直なところです。ただ、自分たちの世代以外でも、一括りにされた呼ばれ方はあるものなので、そういうものかな、といった諦め感のようなものもある気がします。

私が「ロスジェネ」という言葉を意識したのはごく最近のことです。労働問題を取材する関係で、雨宮処凛さんの著書を読む機会があったのですが、その本で「二〇代の頃、アルバイトのフリーターの友人たちと話していて、『一〇年後はホームレスだね』なんて言って笑い合っていたら、一〇年たったら本当にそうなっちゃった」という話を読んだときに、初めて世代の問題を意識しました。私も友達と似たようなシチュエーションで、「将来はホームレス」のようなことを想定して笑ったことがあったからです。そのときに初めて、「ああ、同じ世代は皆、あまり将来に対して明るいイメージがないという点で共通しているのかな」と感じました。

ふと周りを見ても、不安定な働き方をしている人がとても多いし、「ロスジェネ」と言われるようになって、そういう問題を見聞きして自分と照らし合わせてみたら、「あっ、言われてみればそうだったかも」となった。少し前までは全然、意識していなかったのに、社会的に言われるようになって意識が芽生えてきたのかも知れません。

堀　今のお話を伺っていて、私も二〇代後半ぐらいの頃、「私たちより一世代前の人たちは、将来がもっとよくなると思っていたのかも知れないけど、私たちの世代にとって将来は暗いものでしかない」というイメージを持っていたのを思い出しました。伊澤さんはいかがですか。

生まれた時代が悪いとは考えない

伊澤　いつの間にか（ロスジェネと）言われていたというのは、私も強く感じます。確かにたくさん就職活動をしてきましたし、仕事も全然なかったけれど、それを「この世代だからこんな状況になっている」という意識は全くないです。就職に関しては苦労し続け

伊澤氏

ているわけですが、だからといって「自分の生まれた時代が悪かった」とは考えない。やってきたことは確かに全然うまくいってないけど、それはいつの時代に生まれても同じようになっただろうと思うからです。自分から「私はロストジェネレーション世代だ」なんて考えたこともありませんし、ロスジェネだからこうなったという意識もありません。

堀　伊澤さんはご自分を責め過ぎているような気がします。仮に伊澤さんが二年早く生まれていれば、バブル期に卒業できたわけですよね。私は、もしも自分が二年早く生まれていたら、大卒後、進学せずに就職していたかも知れない思うときがあります。伊澤さんは、バブル期に卒業していても就職しようという感じはなかったのでしょうか。

伊澤　変わらないと思います。二年早く生まれていても、また学校に行ったと思います。そもそも、生まれた年は変えようがないのだから、そういう発想自体、したこともないです。

堀　では「ロスジェネ世代」と呼ばれていても、自分にはあまり関係ないというか、それで自分のことが説明されたような感じになったり、シンパシーを感じたりすることはありませんか。

伊澤　ええ。そう呼ばれていることは知っていますが、だからといって、それについて何かを考えたりすることはありません。例えば、修士論文が通らなかったのは三〇歳ぐらいの時でしたが、それは自分の力が足りなかったということで納得しました。それを蒸し返すようなこともしたくありません。

堀　わかりました。お二人より少し若い世代の安田さんはどうお考えになりますか。

いろいろな人がさまざまな立場で行動

安田　私もロスジェネという言葉は知っていたのですが、今回、座談会のお話をいただいて、「あっ、そうか、俺ってロスジェネ世代に含まれるのか」と改めて感じました。つまり、今まで普段の生活では、「ロストジェネレーション」という言葉を単語として知っていただけで意識はして来なかったのです。私は三〇代前半の友人が結構多くて、個人的にお酒を飲みに行ったりカラオケに行ったりするのですが、いわゆる「ロスジェネ世代」の人たちと話す中で感じるのは、さまざまな立場の人がいることです。

先月も高校の同級生の結婚式の二次会に参加したのですが、そのなかには「就職氷河期」の中で大学を出ていわゆる有名企業に入って、恐らくは定年まで勤め上げるだろう人がいれば、フリーターを続けている人や、できちゃった結婚をした人もいました。皆、それぞれの生き方をしていることを肌で感じています。

堀　そうですね。私たちより前の世代は、大体何歳ぐらいで結婚してとか、子供が生まれてとか、家を持って、といったライフプランがあったのかも知れませんが、そういう共通性がないという感覚は凄くわかります。

みなさん、あまりロスジェネという世代を意識していないということでしたが、我々の世代は働く状況とか年金問題とかでよく、「団塊世代などの先行世代は凄く得をしていて、それに比べてロスジェネ世代は損をしている」と言われたりします。なかには「中高年が既得権を守ったために、ロスジェネが弾き出されてしまった」というようなことを言う人もいるわけです。そのことに関してはどう考えますか。先ほどのお話を聞く限り、伊澤さんはそうは思わないということでしょうか。

他の世代と比べることも損した感もない

伊澤　はい、思わないですね。損をしていると言われているのは知っていますし、実際、他の世代と比べればそう言えるのかも知れない。私より年長の人に「ロスジェネ世代は大変だけど、被害者のような態度を取るんじゃないよ」と言われたこともあるので、何となくそういう空気は感じます。でも、だからといって、私から上の世代の人に何か文句を言ったり、「楽でいいですね」などと言ったりはしませんし、思ったこともない。繰り返すようですが、若返るとか世代を動けるわけもないのだから、意味のない議論になってしまうと思うんです。

安田　いわゆる大学を出て有名企業に入ったような人のなかには、お金とか安定を求めている人も多いと思います。ですから、そういう価値観を持っている人のなかには、損していると思っている人もいるだろうと、たまに感じることはあります。

ただ、私は高校を出てずっとフリーターをやっていたのですが、お金とか安定より自分の好きなことや、やりたいことが大事でした。最低限食べていければお金は二の次で、自分の好きな仕事とか生きやすい環境を求めてきたので、損したとの意識はありません。そこは人によって違うのではないでしょうか。

堀　同世代の中でも感じ方は価値観によって違うということですね。渡辺さんはいかがですか。

厳しくなっている同世代の働き方

渡辺　私はお二人に比べると、ちょっと被害者意識が強いのかな、と思って聞いていました。「割と損しているな」みたいな意識はやっぱりあります。

私が前の世代で一番比べるのは、やはり親の世代です。私の母は一九六〇年代ぐらいまでは勤めていたのですが、あまりにも言うことがかけ離れていて話が通じない。当時の女性の働き方や意識が、今の私たちが置かれている状況とあまりに違い過ぎちゃって、最初から話が噛み合わないのです。周囲の同世代の人を見ていても厳しさは増しているし、母の時代に比べると働き方が明らかに厳しくなっているような意識がありますから、そういう意味では大変な時代になっている、というおぼろげな感じがありました。

ただ、中高年の既得権のせいで損をしているとか、そういったことを考えたことはあまりないです。同世代の人と「親の世代は年金とかが充実していて羨ましい。私たちは絶対損しているよね」みたいな話をしたこともありますが、それも漠然と「いい時代の頃が羨ましい」といったような感じなので、中高年がいけないとか既得権のせいで、

といった考え方はあまりしたことはなかったですね。

後輩が入ってこない小規模企業

堀　働き方が厳しくなってきている話ですが、具体的にどういった点で厳しくなっていると思われますか。

渡辺　私は規模の小さな会社の正規社員の厳しさを感じます。最初に会社員になったのは二〇代の半ばですが、小さな会社で後輩が入って来なくて、いつまで経っても自分が一番若いわけです。すると、いつまでも新人意識のようなものが抜けず、例え前日に仕事で凄く遅くなっても翌朝にあまり遅くは来られない、といったプレッシャーがありました。年配の人は遅刻するのですが、自分にはそれは難しいし、仮に多少遅れたとしても、やはり緊張感が全然違います。

堀　後輩がなかなか入ってこないプレッシャーはよくわかります。いつまで経っても自分が一番下で、若手のような感じでずっといることになるんですよね。

渡辺　そうです。先輩から「もう何年もたつのに、いつまでも新人みたいな感じでいちゃだめだよ」と注意されたことがありましたが、「そうはいっても、実態としては私が一番下だよ」と思ってしまったりして、新人意識がいつまでも抜けなかったのを覚えています。

堀　私も「もう若手じゃないよ」と言われて、「えっ、でも、まだ下が入ってこないし」と思ったことがありましたので、その気持ちは理解できます。渡辺さんのお話を伺うと、正社員の働き方の厳しさがよく伝わってきますね。

渡辺氏

正規社員の負荷が重く、長時間労働に

渡辺　私は比較的小さな会社を渡り歩いてきましたが、その中に三カ月ぐらいで逃げ出した会社がありました。そこは、今まで働いた中では一番過酷で責任も重かった。仕事自体はデータ入力作業が中心だったのですが、入って一カ月目で、入力作業をしながら同じ仕事をする派遣社員やパートの人たちの作業量の管理までやらされることになりました。派遣やパートの人は基本的に残業をさせられないので、時間管理をちゃんとしないといけないからと言われて、自分も作業しつつ、リーダーとして作業量の割り振りや進行の管理まで、いきなりやらされることになったのです。法律面はかなり守られている会社でしたが、正規社員の負荷はかなり重くて、長時間労働になってしまうのは避けられない状況でした。

非正規社員の仕事にも責任が

堀　なるほど。伊澤さんは、正規社員のご経験はないですよね。

伊澤　ありません。

堀　正規社員の方と一緒に働いたり、同じ職場で働くことがあったと思いますが、伊澤さんには、正規社員の働き方はどのように映っていたのでしょう。

伊澤　正規社員のほうが安定しているし、それはいいことですよね。

堀　伊澤さんも、できれば正社員になりたいと思いますか。

伊澤　はい。別に日雇い派遣がやりたいのではなく、仕事をしないと干上がってしまうからやっているだけで、日雇いの働き方を積極的に選んでいるわけではないです。

堀　正社員は安定しているだけではなく、渡辺さんのお話のように、かなり重い責任を持たされたり長く働かされたりする部分も持ち合わせていると言われていますが、それについてはどう思いますか。

伊澤　責任があるとは思いますが、日雇い派遣の責任が軽いのかといえば、単に雇用形態が違うというだけで、決してそうは思いません。直近で私がやっていたのは宅配便の手伝い的なことで、誰でもできる仕事と言ってしまえば確かにそうですが、それでも自分が持っていった荷物は、自分が相手にちゃんと届けた荷物なので、そこをあまり卑下するつもりはありません。自分としては、正社員にはなっていないけれど、やっている仕事に責任を持っているし、もしこれから正社員になるとしたら、もちろん責任をもって働きたいと思う。要するに、仕事であれば、どんなことでも責任を持ってやっていきたいということです。

渡辺　私の友人で、会社の秘書をしている人がいます。派遣社員で働いているのですが、働き方を聞くと正規社員と何ら変わらない。役員の仕事が終わって帰るまで、何時になってもいなければいけなくて、責任も重いみたいです。

堀　それって派遣の働き方としては少しおかしいですよね。派遣社員のメリットの一つに、労働時間をある程度自由にできることがあると思いますが、今のお話では何のために派遣の働き方を選択しているのかわからないですよね。

渡辺　私もそうですが、正規社員は仕事の終わる時間をなかなか自分では決められないですよね。仕事が終わるまでは帰れないから、職場の友人と飲みの約束はできても、職場外の友人と付き合うのはかなり難しかったこともありました。でも、彼女の場合は、正規社員ではないのに、そういう働き方を強いられていることになるわけです。

あと、先ほどの伊澤さんの話に関して、私も「非正規社員だから責任がない」と思っているわけではありません。以前、働いた職場で、派遣社員でもパートタイマーでもかなり選別していた会社もありました。「使えなければ一カ月の契約期間で終わりにして、使える子は更新する」といった感じで、仕事の内容もそれなりにスピードとか成果が求められていました。そういうのを見ると、正規社員も非正規社員もあまり変わらない職場もある気がします。

非正規社員の働き方にもおかしな点が

堀　伊澤さんがおっしゃるように、ど

んな仕事にも責任があるのは当然ですが、それにしても非正規社員の働き方にもおかしな点があるような気がします。今まで働いたご経験の中で、「日雇い派遣にしては責任を持たされ過ぎではないか？」と感じたことはありませんか。

伊澤　そういうこともありました。日雇い派遣の前は警備員のアルバイトをやっていたのですが、いきなり現場に行かされて、たまたま自分が一番長かったというだけで二〇人ぐらいいる人たちのまとめ役をやる羽目になってしまったことがあります。

堀　そういうとき、「自分にこの仕事をやらせるのはおかしいんじゃないか？」とは思いませんでしたか。

伊澤　多少思いました。責任というか、やっている内容のわりに賃金が安いと感じるのです。でも、賃金が安いからといって、責任をとらなくていいとは考えません。私は、仕事であれば、どんなことにも責任はあると思っています。それは重い軽いではなく、あるわけだから、きちんと果たしていきたいと考えています。

熱心な派遣社員を引き上げる仕組みがない

堀　伊澤さんは、凄く責任感の強い方だと思いますが、日雇い派遣の人たちの中には、多分いろいろな人がいるのではないでしょうか。伊澤さんのように責任を持たれてやられている人が多いとの印象を持っていますか。

伊澤　それは本当にさまざまですね。中にはすごく熱心にやっている人もいます。

堀　そういう人を引き上げていくような仕組みのようなものは、日雇い派遣にはないですか。

伊澤　ないですね。日雇い派遣に関しては、お金にしても安定にしても、今以上に何かやるのは難しい。そこから抜け出すのも難しいし、引き上げるシステムもありません。

堀　どうしても、日々の仕事、細切れの仕事という形になってしまうということですね。安田さんは、またちょっと違うキャリアですが、いかがですか。

仕事内容より組織問題に嫌気が差して退職

安田　私は二〇〇七年に一年近く、アパレル関係の会社に正社員として就職して営業の仕事をやりました。私の仕事はいわゆるルートセールスで、長時間労働はあまりありませんでした。ただ、企業にいた当時は同僚が「普通の人たち」に見えましたね。

堀　普通の人？

安田　仕事は仕事、プライベートはプライベートで切り分けている。私は仕事を仕事として割り切れず、仕事に求め過ぎてしまうので、その辺の違和感を抱きつつ働いていました。それから、企業で働いていて、出世争いで足の引っ張り合いをしていたり、誰とお昼ご飯に行ったのかを他の誰かがチェックしたりとかしているのを見て、「企業ってこういう世界なのか。じゃあ、自分には合わないな」と思って辞めました。

堀　仕事内容とかよりは組織の問題が大きかった。

安田　そうですね。組織とか人間関係、仕事以外の部分で嫌気が差して辞めた感じです。今後も、企業に正社員として就職して働くよりは、個人事業主として働くことを選びたいです。

堀　今度は自分でつくるわけですね。

安田　そうですね。例えば、ＮＰＯをつくっちゃうとか、フリーで仕事する場を作れれば。というのも、今までいろいろなところで働いてきて、自分でやっていくしかないのかな、というのが少しずつ見えてきた気がするのです。まだ漠然としていますが、最近、企業とか組織で働くより、自分で稼いだ方が満足できそうだと考えるようになりました。

最低限食べていける基準とは？

堀　収入についてですが、安田さんは先ほど、「お金や安定よりも、やりたいことをして最低限食べていければ」と話されていました。この「最低限食べていければ」という基準って大体、幾らぐらいのことなのでしょうか。

安田　私の感覚では、東京であれば月二〇万円弱ぐらい、年収で二四〇万円ぐらいあれば、といった感じですね。

堀　この基準の考え方って凄く難しいと思うのですが、渡辺さんはどう思われますか。

文化的要素も含めて考えるように

渡辺　年収三〇〇万円あたりのラインがあって、それはとても安いと言われていますが、私は「三〇〇万あれば十分暮らしていける」と思ったりしますね。ただ、堀さんが言われるように、この基準って確かに難しいと思います。私も安田さんに割と近い考え方で、安定とかお金をたくさん欲しいと思ったことはあまりなくて、好きなことができて最低限食べていければいいかな、と思って、大学卒業時にも就職活動らしい活動はしませんでした。

　ただ、以前は「最低限」を凄く低く考えていたのですが、本当にお給料が安いと食費と家賃などの最低限のことは何とかなっても、その他のことが何もできなくなってしまうんです。実際、映画に行くとか本や服を買うことまでやりくりができない時期があって、精神的にかなりきつかった。それからは、最低限のランクを自分の中で低く設定し過ぎたことを反省して、文化的な要素も多少含めた意味での「最低限」を考えなければいけないと思うようになりました。

堀　最近、若者が車に乗らないとか海外旅行に行かないといったように、あまりお金を使わないと言われたりしま

すが、安定とかお金よりも最低限食べていければ、やりがいのあるやりたいことをする方が先に来るといった意識って、何となく私たちの世代に強い感じがするのですが、伊澤さんはどうですか。

伊澤　まあ、そうですね。私も、食べるとか住むことをなるべく低く抑えて、そこで浮いたお金をやりたいことに回していきたいという考えはありますね。

生活のためにつまらない仕事を

堀　では、できれば趣味と仕事のバランスをとってやっていくのが理想で、仮に本格的に仕事を始められたとしても、仕事はわりとお金を稼ぐ手段みたいな感覚で捉えているということですか。

伊澤　はい。仕事をしなきゃ死んでしまいますが、仕事ばかりやって生きているわけでもないのだから。

堀　でも、仕事で自己実現したいタイプの人もいると思いますが。

伊澤　「仕事が趣味」という人は、それはとてもいいし邪魔するつもりも全然ないので、そういう人については、その人がいいならそれでいいと思うけど、自分としては趣味とか文化的なことに回していきたいと思います。

　私のやってきた仕事は大抵つまらないので、仕事だけでは気持ち的に潰れてしまうと思うんです。警備員にしても倉庫の中での作業も面白くないですよ、正直言って。

堀　日雇いの仕事と一言で言っても、恐らくはいろいろな種類の仕事があると思いますが、伊澤さんのしてきた仕事はご自分で選んだものですか。

伊澤　そうです。ただ、それは別にやりたかったわけではない。例えば、警備員の仕事は、学校の都合があるので、割と時間を選べて、なおかつ稼げるバイトということで選んだわけです。

堀　これは日雇い派遣の仕事になりますか。

伊澤　警備員は一応、契約社員ですが、やり方や実態は日雇いとほぼ同じでしょう。仕事があるときだけ発注があって働いた分だけ支払われる。警備は派遣がだめな仕事だけど、別に自分のものを警備するわけじゃなくて必ずどこかに行って警備するから、その働き方としては、最近までやっていた日雇いの仕事と警備員はほとんど変わらない。事前に予約しておいて、その日に電話して、どこそこへ行けと指示されて、そこで働くわけです。

日給が下がったうえに、仕事の需要も減少

堀　伊澤さんは比較的長期に渡って、非正規労働者の仕事の世界を見て来ているわけですが、伊澤さんがご存じの範囲で、働き始めた頃と今とで何か以前と変わってきたと感じることってありますか。

伊澤　大きな違いは、給料が下がっていることです。一番最初に警備員をやったときは、日当は九〇〇〇円でしたが、週五回やるとベースアップして、日当自体が一万円になりました。結局、警備は七年ぐらいやりましたが、最後は八〇〇〇円になっていた。今はもっと低いと思います。

　それから、今は給料以前に仕事そのものがない。九年前は、警備員の仕事は希望すれば、日雇いで大抵どこかに行けたけど、今はやっていることは違うけれども全然ないですね。

堀　おっしゃるように、九〇年代半ばから二〇〇〇年ぐらいはアルバイトが足りないと言われた時期がありましたよね。でも、最近は警備員などの需要自体、なくなっている感じがするわけですか。

伊澤　警備員というのは、基本的には何かあったときのための要員で、普段は事故が起こらないように見ているだけです。これは周りから見れば、何もしてないように映ると思うんですよ。そこが辛い。事故を起こさないようにするのが仕事なのに、端から見れば、ただ立っているだけのように見られてしまう。だから、「何もしていない無駄な人」と思われて需要がなくなることは考えられます。

堀　景気が悪くなってきて、いろんなことにお金が割けなくなれば、一番最初に影響が出てきやすい仕事だろうということですね。では、今度は皆さんが今後、どういった人生を送っていこうと思われているのか、できれば仕事だけではなく、結婚や子ども、住宅などご自分の生活面も含めたお話を伺いたいと思います。渡辺さんからお願いできますか。

困難な仕事と家庭の両立

渡辺　将来設計は今、ちょうど凄く迷っている最中です。出産を考えるぎりぎりの年齢に近くなってきていますので、かなり問題だとは思っています。考えて結論が出るわけではないし、自分一人で何とかなることでもないけれど、そういう年齢になっているとの自覚はありますね。ただ、子供を持つならここ一、二年だろうという切羽詰まった感があるのですが、その一方で無理なら無理で、という気持ちもある。私には「家庭に入って仕事を辞める」といったイメージは、今のところあまりないので、どちらかというと仕事をどう続けていくかに関心があるからです。

堀　お仕事とのバランスの問題で、そのように考えざるを得ないということでしょうか。

渡辺　はい。私の妹は地方公務員ですが、彼女は働き続けながら二人子供を産んでいます。今は育児休暇中ですが、当然、復職できる予定です。でも、私のように小さな会社で働いてきていると、妹のようにはできない状況がずっとあって、もし子供ができたら、仕事は実質的に辞めなきゃならないだろうと思っていました。

　育児休暇を取る権利はあるのだから、会社と交渉したり、最悪の場合は争う手段もありますが、現実的に考えれば小さな職場で、簡単に代わりの人が見つからないような仕事をしているので、産休・育休というのは無理だろうと思わざるを得ません。だからこれまでも、子供を持つことをあまり意識できずに働いてきた気がします。

働き続けるためのキャリア構築を

　将来についても、明るい展望は持っていませんが、今後は自分の専門性のようなものをある程度は構築しないとやっていけないだろう、といった緊張感もあります。（記者職は）資格があ

る仕事ではないので難しいかもしれませんが、一応、イメージとしては、キャリアを築けていければいいな、という希望はありますね。

堀　一般的に記者というお仕事はかなり専門性が高いイメージがありますが。

渡辺　そうかも知れませんし、確かに周りからはそう言われることもあります。同世代の友人に、「キャリア、ちゃんとあるじゃん」とか。でも、自分自身は、これでどこでも通用する、という意識はないので、みんなが言うほど専門性があるとは思えないのです。

堀　ところで、最近、「婚活」が話題になりましたが、周りでそういうお話を聞かれたりはしますか。

渡辺　私の交遊関係に偏りがあるのかも知れませんが、周囲には「結婚して解決しちゃおう」みたいな同性の人はあまりいません。それと、男性の友人も含めて、自分の働き方というか、生き方だと思うんですけど、どう生きていこうかというところで未だにもがいている人が多いので、まだ現実の生活に着地点が見出せない人、自分探し的なところにいる人の方がどちらかといえば多い気がします。

堀　「自分探し的なところ」というのは、具体的にどういう状態なのでしょうか。

渡辺　まだ思い通りの仕事に就けていないとか、思った仕事に就いたつもりがうまくいかなくて、次どうしようかとか、何が向いているか決まらず、とりあえずの仕事に就いていたりとか。要は、自分の中で、「この仕事でこの先もずっとやっていこう」と定まっている人が比較的少なくて、私も含めて、将来の具体的なイメージがまだあまりできてないように感じています。家族をつくるかどうか、まだぎりぎり逃げられる年齢なので、多分逃げているんじゃないかなとも思います。

やはり、家庭って凄く大きくて、そこが結構分かれ道な気がします。家庭や子供を持てば、もう嫌でもお金のために働かなくてはと思うようになってしまいますよね。

司会・堀

気楽で不自由ない一人の生活

堀　そうかも知れませんね。伊澤さんは、何か将来展望をお持ちでしたら、お伺いしたいのですが。

伊澤　展望らしき展望はないですね。

堀　展望というか、将来、こんな感じになっていたいといった希望はありませんか。

伊澤　少なくとも「結婚」はないですね。したくないですし、これまでもしようと思ったことは一度もありません。

堀　それは、もし何か理由があったらお聞かせください。

伊澤　私よりずっと年上の人で独身の人を見てきているのですが、その人は楽しくやっているわけです。自分自身、一人で割と気楽なので、したいと思ったことはないです。ただ、こう言うと、いろいろ言う人がいて・・・。親にも「何をやってるんだ」と言われたりするので、それは嫌ですよね。

例えば、仕事のことについても、今、私は安定した仕事をしていないけれど、それは決して仕事をしたくないからそうなっているわけではなく、探し続けて動いていて、結果としてそうなっているというだけであって。それを「何もしてないんじゃないか」とか言われることが多くて辛いですよね。

結婚に関しては、私には一九七四年生まれの弟がいて結婚して楽しそうに暮らしています。それはそれでいいけれど、結婚すれば幸せで一人だったら不幸せとは思わないということです。ただ、この先も同じ考えかと言えば、それはわからない。明日は違うことを言っているかも知れません。

堀　伊澤さんは、ご両親とは別に住んでいらっしゃるんですか。

伊澤　生まれたときからずっと同じところに住んでいて、今も一緒に住んでいます。

堀　じゃあ、生活にあまり不自由はないという感じですか。例えば、家事とかもご両親がやってくださるのでしょうか。

伊澤　生活に不自由はありませんが、家事は自分の分は自分でしています。料理とか洗濯とかも別に苦にはなりません。

堀　男性で、家事をやってもらいたいから結婚するという方もままいらっしゃるかと思うのですが。

伊澤　そういう発想は嫌ですよね。自分の分を人にやらせることは、したくないです。

堀　そういう点でも、一人でも不自由はないということですね。

伊澤　ええ。結婚については本当にないです。

やりがいあって楽しいユニオンの相談活動

堀　では、お仕事のことを少し聞かせてください。今、派遣ユニオンの執行委員をなさっているということでしたが、将来的にも、このユニオンを中心に活動していかれるお考えでしょうか。

伊澤　もともと日雇い派遣の不正天引きで駆け込んだのがきっかけですが、今のところは事務所にいるのがやりがいもあって楽しいんですよね。何をやっているかといえば電話番なのですが。

堀　具体的には、ユニオンにかかってきた電話の対応をされているということですよね。

伊澤　そう。電話相談です。他に、ビラ配りに行くなどの活動もしていますけど、基本は電話応対です。今はやはり、派遣切りの相談が多いですね。派遣スタッフには契約期間があるのに、契約期間途中で解雇されたり辞めろと言われている。しかも、その人が会社の寮とかに住んでいて、追い出されたりして、どうしたらいいかわからなくて電話をかけてくるわけです。

堀　なるほど。それに伊澤さんがアドバイスをされているわけですか。

伊澤　そうですね。アドバイスといっても、励ましているような感じですけど。

堀　例えば、どんな感じで励まされるんですか。

伊澤　会社に首だと言われて黙っていたら、本当に首になっちゃうのに、何もしないで言われるままに受け入れちゃう人も多いわけです。そんなの受け入れる必要はないのだからストレートに「受け入れません」と言ってみたらどうですかとか、寮もすぐ出ていく必要はないわけだから「居座ってみたらどうか」と言ってみたり。

堀　そういういわば労働法の知識というか、「ここまでは抵抗できるんだよ」みたいな知識はユニオンで学ばれたのですか。

伊澤　割とそうですね。学んでいるというほど学んではいないけれど、一応、昔は法学部だったし。ただ、「首になった」とか「急に家を出ていけと言われて困る」というのは、法律以前の話ですよね。自分の意見を言わなきゃだめなので、「言ったらどうですか」とアドバイスするということで、あまり知識は使ってないです。

堀　例えそうであっても、経営側に抵抗するのは、恐らく有効な時とあまり有効じゃない場合があると思うのですが、そのあたりの見極めは、ユニオンで身につけられたのでしょうか。というのは、電話応対ってそう簡単に誰もができるわけではない。一般の人がふらっと行ってできるものではないと思うのです。

労働組合は代理人ではない

伊澤　そこは労働組合なので、自然に身についたというか。ただ、労働組合って、働いている人が集まっているものであって、お役所とかではないわけです。極端な話、相談してきた人に「お前とは一緒にやりたくないよ」と言ってもいい。

堀　「お前」というのは、電話をかけて来た人ですか。

伊澤　はい。組合で交渉するとなれば、その人も組合員になるわけですよ。あくまでその人の仕事の話なのだから。本来、自分でやるべき問題だけど、みんなで一緒に支え合っていこうというのが労働組合の趣旨です。それなのに、そこをよく理解していない人が割とたくさんいるわけです。ユニオンに電話すれば、代理人のように代わりに交渉してくれて問題も解決してくれるんじゃないかと考えていたりする。そういうことを聞いてくる電話がかかってくるので、そこはきちんと、「ここはそういう場所じゃない。あなたの言うことは無理です」と説明するようにしています。

堀　以前、一時、ご自宅で休まれていた時期は、ある種、社会と離れてしまった時期だったのかなと推察するのですが、今、こうした組織に所属されるようになったのは、何かきっかけがあったのですか。

伊澤　特にないですけど、確かに前は社会から離れていましたね。大学院に行っていた時期も、専攻が古代ギリシャ哲学なので、家にこもってひたすら文献を読む生活でしたし。何でそうなったかといえば、流れですね。その時々、やらねばならないことをやっていたら自然にこうなった。

堀　つまり、日雇い派遣のデータ装備費の問題で動いて、派遣ユニオンと出会うこととなり、その結果、ユニオンの電話番兼相談をされるようになったのが今の流れということですね。

解決できる問題があることを知って欲しい

伊澤　そうです。もちろん組合が何でも解決できるわけではないですけど、自分も問題は一応解決したし、解決できることがあるということは広く知ってもらいたいと思っています。

堀　御自分の問題が解決した時はどういう感じでしたか。まさか解決するとは思っていなかった？

伊澤　いや、そうでもなかった。それぞれのケースで違うと思いますが、自分の場合は相手が間違っていると思って団体交渉して、その結果、勝ち取ったという感じです。

堀　よく、そういうことを契機に連帯に目覚めていく人がいますが、伊澤さんはそういうタイプではないですか。

伊澤　そういうタイプかもしれません。面白いですから。企業内組合ではなく一般労働組合だから、多様な雇用形態の人がいる。名前は派遣ユニオンだけど、派遣ばかりじゃなく、いろんなことをやってこられた方がいる。それだけでも面白いですよ。

堀　じゃあ、今は日々、この活動が凄く楽しいという感じですか。

伊澤　はい。わりと健康的な感じですしね。振り返ると、以前は狂っているような状態でした。警備員をやっていた当時は、朝から夕方まで警備の仕事をして、その後で学校に行って図書館に行って、全然寝る時間がなかった。なのに、あまり眠くならなかったので、好都合だと思っていたら、本当に寝たい時、寝なくちゃいけない時に寝られなくなっちゃった。これを表現するのは難しいのですが、とても辛かったです。

堀　それは辛いですよね。そのときに比べると、今はとても健康的に過ごしている。

伊澤　はい、当時に比べたら、ちゃんと寝ています。

将来を見据えた生活基盤づくりが必要

堀　安田さんは、将来、フリーランスで仕事をすることも念頭に置かれているということでしたが。

安田　今、若者支援のNPOで働いていて思うのは、自分が五年、一〇年後、三〇代、四〇代になったときに若者支援の仕事ができるのか、今の給料で仕事ができているだろうか、ということです。そう考えてしまうことも含め、

今は職場の人間関係にすごく恵まれていて、なおかつ自分を必要としてくれていることがあるので、別の（自分の生活基盤となる）仕事も必要になるのかな、と。私もかなり行き当たりばったりですね。

堀　将来、ご結婚とか家庭を持ちたいとか、そういうご希望はありますか。

安田　正直、それはどちらでも。家族ができたらそれはそれでいいですし、一人なら一人でも構わない。あまり拘っていませんし、拘らない方がいいのかなと思ったりもします。あくまで自分の意思と、そのとき出会った人の中で自然に決めていければいいと思っています。

堀　安田さんは、今回の参加者のなかでは比較的若いので、まだあまりそういうことを考える年齢ではないのかも知れませんが、一般的には家庭の主たる生計維持者ということを男性が期待されることが多いのですが、それに関してはいかがですか。

安田　仮にもしパートナーができたら、私はそういう人にはずっと働いていて欲しいですね。専業主婦志向の人とは一緒になれないと思います。

堀　若い世代になればなるほど、男性はそう考える人が多くなりますよね。一般には、女性は若い世代は割と保守化しているといいますが、専業主婦になりたいと考える人も多くなっていると言われていたりしますが。

安田　そうですね。そういう傾向はあると思いますね。

自分の道を突き進みたい半面、家庭のために働くことに憧れも

堀　NPOで働く男性が辞めるきっかけは、結婚が多いと言う話も聞きますが。

安田　それも多いと思いますね。われわれのスタッフも三〇歳前後が多いのですが、これから五年、一〇年先にみんな年を取って若者支援ができるのかな、という不安もあったりします。事実、私も企業に勤めていたときの月給ベースで五万円以上下がりました。それでもNPOでもう一回働きたいと思ったので、いま働いているわけですが、同世代の結婚している友人とか子供がいる友人に会うと、家族のために働くお父さんに憧れますね。そう考えると、やはりNPOでずっと働き続けることは難しいと思ってしまう。

自分のやりたいことを突き進みたいという基本は変わらずあるのですが、一方で、同世代とかロスジェネ世代の友人に会って「ああ、家庭いいな、子供いいな」と思うこともたまにはありますね。

堀　いずれにしても、将来は今のお仕事の延長線上でやっていきたいという感じですか。

安田　そうですね。今は正規職員で働いていますが、今のNPOとは、仮に正規職員でなくなっても、関係をずっと継続しながら自分のめざしたい方向性なりを模索し、築いていきたいといったイメージがあります。

資格取得より人や地域とのつながりに重点

堀　若者支援の分野の今後の方向性としてよく言われるのは、例えば、何かの資格を取得したり、新たに資格をつくることによって、支援機関・支援者としての質を保つことを通じて、社会的支援の質を高めていく形があると思うんです。実際にキャリアコンサルタントの資格を取られる人も増えているようですが、安田さん自身は、そういった展望のようなものはありますか。

安田　あまり気にしたことがないですね。キャリアコンサルタントの資格とかは、確かにあればいいかなとは思いますが、それよりも一番重要なものって、人とうまくつながれる能力ではないでしょうか。私は人や地域をずっと大切にしてきたので、資格とか肩書よりも、人であり地域でありって感じですね。

堀　そのあたりを大事にしつつ、延長線上にフリーランスで働くことや自らNPOを立ち上げることが見えてくるのですね。

安田　そうですね。若者支援とか最初にやっていた農業とかですね。

堀　安田さんは、農業という方向も考えているのですね。

安田　はい。そういうことも含めて、自分は人と地域のつながりを大事にしている人間だと、最近強く感じています。

堀　皆さんが今、さまざまな状況にいらっしゃることを伺ってきました。そこで今度は、政府や社会の支援について、当事者として感じていることがあれば、聞かせていただきたいと思います。政府がいろいろな支援をしていたり、組合も伊澤さんがやられているような支援もあります。そういう現在の状況について、渡辺さん、どのように見ていますか。

大多数の女性は仕事と結婚・育児の両立は無理

渡辺　先ほど、ちょっと言い足りなかったことも含めてお話したいと思います。仕事と結婚生活の両立のようなことを考えた時に、私は普通に仕事をしながら結婚をして子供を持ちたいと思っているわけです。でも、自分の知る範囲では、結婚して子供を持ち、なおかつ仕事のキャリアを継続できている女性は、公務員と名のある大企業に勤める人ぐらい。あとは、出産と同時に仕事を辞めているか、私と同じように、まだ結婚もしていないし子供も持てていない状況なのです。

私自身は、男女平等の教育を受けてきた影響もあるとは思いますが、仕事を続けていくことがどうしても前提にあって、結婚したから家庭に入るという感覚がなく育ってきています。でも、仕事をしながら結婚して子供を、と考えると、自分の責任が全くないとはいいませんが、それを実現できるのは一部の恵まれた層だけで、大多数の女性はやはりそうじゃない。こうしたことは、政府に言えば解決するというものでもないかも知れないけれど、現実問題としてあると思うのです。

堀　現実は確かにそうですよね。

渡辺　難しいけど、そこが解決できないと前には進まない。今は現実としてはパートタイマーなどで働きながら子育てをするしかないわけだから、非常に不満ですね。自分の努力が足りなくて公務員や大企業の職に就けなかったんじゃないのかと言われればそういう面もあるかも知れませんが、それでも

「大多数の女性は無理ですよ」ということは声を大にして言いたいです。政府が行っている今の支援については、ちょっとピンと来ないです。逆に、「どういう支援があるの？」という感じです。

堀　そうですね。あまり知られていない部分もあるのかも知れません。でも例えば、ジョブカフェとかヤングハローワークとか、政府もいろいろと頑張っています。もちろん利用している方もたくさんいらっしゃるのですが、なかなか広くみんなに、というわけにもいかないのでしょう。

渡辺　そうか。ハローワークとかはそうですね。私も利用したことがあります。ただ、不信感を持っている同世代の友人もいるし、なかには「役に立たない」という人もいます。私は不信感を持っているわけではありませんが、業種によって少し差は出てくるのかも、とは思いますね。例えば、記者のような仕事を職安で探すのはなかなか難しい。

変わっていない出産と同時に辞める環境

堀　そういった求人はなかなか出てこないですよね。それから女性の場合、渡辺さんが先ほど、お話されたように、特に規模の小さい会社だと休みにくいし、未だに休ませてもらえないような問題がありますよね。いわゆるキャリアをつくってきた人でも、それを中断するのは勇気が要ると思います。

渡辺　実態として休めないですね。制度がきちんとしている大企業の正規社員や公務員なら、子供を産んでも辞めずに続けられると思いますが、そうじゃない人は産むことを諦めているか、あるいはキャリアを指向していないから辞められるのかも知れない。出産と同時に当たり前のように辞めるという状況は、時代が変わってもあまり変わってないのかなという感じを受けます。

堀　変わってないですね。今でも、出産をきっかけに七割ぐらいの女性が辞めています。伊澤さんは、ご自分が支援者として活動されているわけですが、派遣ユニオンに辿り着かれる前に、「こういう支援があったらよかったのに」と思っていたことはありますか。

生活支援は組合より政府・行政が

伊澤　そういうのはないですね。支援はあったのかも知れないけど、あまり使った覚えはないです。

堀　学校時代に「こういう経験ができたらよかったのに」と思ったことはありませんでしたか。例えば、高校の進路指導とか、大学にも就職部とかキャリア支援があったと思いますが、そういった支援は利用しませんでしたか。

伊澤　大学の就職部には行ったことがないです。関係なかったので。自分の進路は、人に相談して決めたわけではなく、自分一人で考えて選びました。だから、そういうものは要らなかったですね。

堀　では、今のユニオンの活動も含めて、こういった支援が必要だと思うことってありませんか。

伊澤　先ほども少し触れましたが、いまユニオンにかかってくる電話は、労働相談ではなく生活相談が多くて、夜に「もう二〇〇円しか持ってない」といった電話がかかってきたりします。そういう人への支援は、組合では無理ですよね。我々のところは特に小さいし、できることも限られているので、そういう生活面での支援は、やはり政府とか行政がやって欲しいと思います。

自分自身を考えると、いま欲しいのは安定した仕事ですが、それをどうにかして欲しいといっても難しいですよね。じゃあ過去を振り返ってみると、家で寝込んでいた時には、私は何かやろうとしているのに周りからは何にもしてないように見られるのが、やっぱり一番辛かったですね。こちらとしては、非常に努力しているつもりで、ただ寝ているだけじゃなくいろいろやろうとしているのに、周りから見ると全然何もしてない、ただ面倒くさいから寝ているだけではないか、と見られるわけです。辛かったといえばそれが辛かったのですが、だからといって何らかの支援によって、それを解決できるかと言われるとそれも難しい。例えば、「ただ怠けているだけだ」と思う人に対して理解を求めるとか、啓蒙活動を行うとかの支援があればいいとは思いますけれど・・・。

役に立たなかったカウンセラーの存在

堀　家にこもっている時、そこに誰かが来て、伊澤さんがどういう状態であるのかを聞いてくれて、どうしたらいいのかをアドバイスしてくれるようなことがあったらよかったと考えることはありませんでしたか。

伊澤　それはありました。ただ、いわゆる民間委託されているような就職支援は、実際に利用したこともありましたが、何の役にも立たなかったですね。

堀　どういった支援をどういう形で利用したのですか。

伊澤　カウンセリングを受けたりしましたが、結局は、履歴書の書き方とか分かり切った話に終始してしまい、アドバイスらしきものと言えば「ハローワークに行け」だけで全然意味がないわけです。でも、だからといって、「どういった支援をしたら意味があるか」と逆に問われたら、難しいですよね。私自身もよくわからないですから。

堀　就職のテクニック的なことだけを教えてもらっても何にもならなかったということですね。例えば面接の練習とか、もう少し実践的なことだったらどうでしょうか。

求人の紹介がもっとあれば

伊澤　それは、求人の紹介があればよかったですよね。

堀　就職の前段階のことだけで、求人の紹介はなかったのですね。ハローワークは、ちょっと利用しにくい感じでしたか。

伊澤　そうですね。求人がなきゃしょうがないですから。

堀　ちなみに、伊澤さんはどういう仕事をめざされていたのですか。特定の仕事に拘りがあったりしましたか。

伊澤　警備員の時は、とにかく外で仕事をやるのは無理だったので、事務職のような仕事を探していました。希望といえばそれくらいで、後は履歴書を送れるものは何でもいいから送れるだ

け送りましたが、面接まではなかなかいかなかったですね。

堀　大学院から公務員とか教員の道に行く人って結構多いと思いますが、伊澤さんの場合は、民間企業への就職活動をしていたのですね。

伊澤　ええ。大学院に残りたいというのが希望でしたから、それがだめになった時は、「もう、できる仕事なら何でもいい」という感じでした。絞り過ぎるとどこにも応募できなくなってしまうので、あまり絞り過ぎないようにして、とにかく片っ端から（履歴書を）出していましたね。

堀　そんなとき、カウンセラーは「もっとやりたい仕事を明確にして」って言わないですか。

伊澤　いろんなカウンセラーに会いましたが、そういうことを言う人もいましたね。

堀　それはちょっと実践的ではないというか、有効ではなかったという印象ですか。

伊澤　そうですね。私はカウンセラーという人が、その場その場で結構適当なことを言っているようで、あまり信用できないです。自分がカウンセラーの勉強をしたわけではないから詳しくは知らないけれど、少なくとも私が会った人たちからは、そういう印象を受けました。ただ、こちらに何かしっかりした考えがあるのか、と問われたら、別にないのですが。

堀　いずれにしても、少し不信感を覚えるような感じだったのですね。伊澤さんには、もっと次々に求人を紹介するタイプの人が合っていたのでしょうか。

伊澤　そうですね。私の場合は、ただ人と話がしたいとかではなかったですからね。

資格さえあれば職業訓練を受けてみたい

堀　もっと具体的に仕事探しをしたかったのですね。では、その足がかりになるかも知れない職業訓練のようなものをやってみようとか、以前にそういう機会があったら受けたかったという気持ちはありますか。

伊澤　ハローワークでは、雇用保険の加入者には職業訓練の話をしますが、私は一度も雇用保険に入ったことはないから受けられなかったのです。

堀　最近はちょっと変わってきて、若干、門戸が開いては来ていますが、伊澤さんが仕事を探した頃には、そういう機会がなかったということですね。もし、受けられれば受けたかったという気持ちはあったのでしょうか。

伊澤　はい。職業訓練については、それを受けたからといって就職できるかどうかはわかりませんが、職業訓練自体が経験になると思うので、機会があれば今でもやりたいですね。ただ、「その間の生活をどうするんだろう？」となってしまいますが。

堀　我々の世代は年齢が上がってきているので、職業訓練を受けている最中の生活費をどうするかが、かなり切実な問題になりますね。

伊澤　そこまで制度が整っていれば、やりたいですよね。でも、その間、無収入になってしまうと、生活ができなくなるのでできない。

堀　では、どんな職業訓練を受けてみたいと思いますか。

伊澤　それはもう何でも。どんなことでもやってみれば楽しいと思うので、特に選ばず、機会があれば受けてみたいですね。

さらなる職業訓練の充実を

堀　わかりました。安田さんも支援者側の立場にもあって、必要な支援を感じたことがあまりないのかも知れませんが、例えば、周りの同世代で不安定な状態にいるような感じの人たちと接してきて、「こういう支援があったら、その人たちがうまく仕事に結びつくのに」と思ったことがあれば聞かせてください。

安田　やはり、職業訓練をもっと充実させていかなければと思います。例えば、北欧のように、離職してもすぐに職業訓練が受けられて、また再就職できるといったスムーズな流れをつくっていくべきです。仮に、失業したときに職業訓練の機会が与えられて、また次の職場で生かせるというような支援体系があって、自分が二〇歳ぐらいの時にそういったスキームを活用できたとしたら、また違った部分のスキルが身に付いていたと思うからです。二〇代はもちろん、三〇代も含めた職業訓練をもう少し幅広く、時代にマッチした形に変えて欲しいと思います。

点のままの支援を線に結ぶ努力を

堀　もう一つ、ご自身が支援者として活動していて、行政に動いてもらいたいことはありませんか。

安田　私は若者支援の仕事をしていますが、実感として若者支援だけで終わっている。若者支援と学校教育とか福祉、医療、さっき伊澤さんがおっしゃった生活相談の問題、ホームレスの問題などが点のままになっている気がしていて、そこを線にしていかければならないと思っています。

　例えば、今、ニートと呼ばれている若者の中には、発達障害の若者やうつ病の若者もいます。そうしたら、いわゆる若者支援だけではなく、福祉や医療のサポートも絶対に必要で、それらを線でつなげていく必要がある。そういった広い枠で支援を捉えていって欲しいですね。

うまく行かなくても自分を責めずに

堀　よくわかりました。では、最後の質問です。今、急に景気が冷え込んでいて、もう一度、非常に不安定な状態で社会に出ていく若者が増えることが危惧されています。今の若者がこの先どういう状況になるかは、実際にはよくわからない部分もあるですが、いずれにしても彼らの歩む道は、必ずしもスムーズなものではないだろうと想像できます。そういう若い人たちに対して、先輩として何かしらメッセージ的ものをお伺いできればと思います。

渡辺　あまり就職がうまくいっていない同世代の友人にも共通するのですが、とにかく自分が悪いんだ、という思いを持ってしまっている人が多い気がします。自己肯定感がないというか、自己否定感が強いというか。それが自己責任論というものなのかも知れませんが、そういう考え方の人が、いまの厳

しい状況にある社会に出てきてうまく行かなかったりしたら、多分、最初に自分を責めてしまうのではないかと思うので、「そうじゃないよ。自分だけのせいじゃないよ」と言いたい。あとは、なるべく周りに弱音を吐いて、みんなでつながっていけたらいいんじゃないか、という思いがありますね。

スムーズに行かないのは、ごく普通のこと

伊澤　世の中、スムーズにはいかないけど、それってごく普通のことだと思うんです。逆に、物事が何でもスムーズに、初めから計画しておいたとおりに進んだら、それはつまらないし退屈してしまうでしょう。私は確固たる計画があったわけではないけれど、それについて別に何とも思わないし、確かに自分はあまりうまくいかなかったけれども、その時々でできることはやってきたつもりなので後悔もありません。

ですから、これから社会に出る人はその時々、やれることを一生懸命やっていけば何とかなると思うし、仮になならなくても、それが一番いいと思います。初めから計画するような生き方は、どうせプランどおりにうまくいくわけがないのだから、私はお勧めしないですね。ならば、どうすればいいかというと、結局、その時々の、目の前のことをやっていくしかないと思うし、「そう思いませんか？」と尋ねてみたいです。

厳しい状況だからこそ出会えるものも

安田　まず、自分が「ロスジェネ世代」でなかったら、恐らくは農業や「育て上げ」ネットに出会っていなかったでしょう。これから社会に出る若者に対しては、今は確かに厳しいかも知れないけれど、そういう状況だからこそ出会えるものもあるはずだ、と言いたいですね。

もう一つ、今、伊澤さんがおっしゃったことと少し被りますが、夢を持つことはいいことだと思いますが、夢を持つことに縛られてしまうと動きづらくなったり、夢が叶わなかったときに、「俺、今まで何をやってきたのかな？」と穴が空いた気持ちになってしまうので、例え夢を持てなくても、持てないなりに今やるべきことをやってみるとか、臨機応変に生きていくとか、いろんな考え方、生き方があっていいと思っています。

堀　本日みなさまにお集まり頂いたのは、マスコミで喧伝されているような「ロスジェネ」像ではない、できるだけ「普通の声」を伝えられないかと考えたからです。今までは、「ロスジェネ世代」を代表するような人たちの発言が目立ち、比較的極端な立場や意見の人にスポットが当たっているような感じがありました。そしてできれば、そうではない「当事者の声」を届けられればと思って企画しました。そういう意味では、今日は皆さんに大変率直にお話しいただき、貴重なご意見を伺うことができました。どうもありがとうございました。

コラム

今回、座談会に参加予定だったが、当日の仕事が長引いて出席できなかったAさんからも、座談会でテーマとなった話題について後日、メールで答えてもらった。以下、その内容を紹介する。

Aさんは一九七三年生まれの未婚女性。大卒後、小売業で三年間の正社員勤務を経て派遣社員として一年働いた後、職業訓練校で一年間和裁を学んで和裁所に九カ月間、勤めた。退職後、再び、派遣会社に登録。現在は二社目となる製造業の会社に秘書として勤務して六年になるという。

「（自分が『ロストジェネレーション』と呼ばれる世代であることは）今回の座談会のお話を頂いてはじめて知った」というAさん。同世代の一体感のようなものも、「同じように学校に行き、就職をしていた二〇代の頃には感じることもあったが、周りが結婚しだしたり、子供が生まれるなど、それぞれの環境が変わってきてからは特に感じません」。また、他の世代については、「仕事や趣味の関係で年配の人とご一緒することも多いが、その世代なりの悩みがそれぞれにあると思うので、わざわざ比べる事はない」とのことだった。

経歴にあるように、Aさんは正規・非正規双方で働いた経験がある。そこで、働き方の違いを尋ねると、「正社員で働いていたときは、すべて自分がやらなければと思っていましたが、派遣社員になってからも派遣先の会社によっては正規社員と同じように働いているため、違いは『保障がないだけ』と感じるようになりました」との答え。Aさんは、派遣社員でありながら、秘書として役員の都合に合わせる多忙な日々を送っている。事実、座談会当日も夜九時過ぎまで残業をしていたという。

では、派遣社員として働くメリットやデメリットはどう考えているのだろう。「メリットは、普段は知り合うことのできない年代や役職の方と知り合い、話をする機会ができること。デメリットといえば、『派遣は決められたことをやる』との大原則を理解していない会社で働いてしまっているということ」だそうだ。

座談会でも大きな論点となった仕事と生活面での将来設計に水を向けると、「結婚願望はないので出産や育児に関する不安はほとんどありません。ただ、自分で選んではいますが、今の派遣という形態は、このまま働き続けられる保障がないという意味で将来に不安があります」とのこと。やはり、継続して働ける保障のないことが、将来への思いに暗い影を落としているようだ。

一方、政府や社会の支援については、「どういう支援があるのかよくわからないので、特に要望はない」と回答。景気が急速に冷え込むなか、これから学校を卒業して社会に出る若者に対しては、「何かというと周りの価値観に左右されがちになりますので、自分で何でも決めていくようにしていくのがいいと思います」とのアドバイスを寄せた。